上田市立西小学校

体育科　４学年

単元名　連鎖交互跳び～友だちと一緒に跳べるかな～（体つくり運動）

授業者　松本　陵雅
指導者　目黒健太（長野県総合教育センター専門主事）

１　本時の主眼

連鎖交互跳びができるようになりつつある子どもたちがジャンプ課題である連鎖交互跳び（入れ替わり）に取り組む中で、友だちと話し合ったりウゴトルを使い、お手本と自分の動画を比べたりする活動を通して、自分たちに合った練習方法を選び、取り組むことができる。

２　視聴覚機器の役割

課題把握、活動時や振り返りの場面で、以下のようにICTを活用する。

学習場面	ICTの利用とその意図
課題を確認する場面（導入・中間）	移動式TVモニターで見本の動画を流し、全体で動きや課題を把握する。
課題解決をする場面（追求）	クロームブックで自分たちの運動を撮影したり、鏡のように使用しタイムリーに自分たちの動きを見たりする。動画比較アプリ「ウゴトル」を使い、同画面上に、自分たちが撮影した動画と見本の動画を比較し、できていないところやどうすればうまくいくのかを見つける手立てとする。
次時への願いをもつ場面（振り返り）	Canvaに振り返りを入力する。友の振り返りを見ることでも課題を明確にすることができる。

３　授業の大要

連鎖交互跳びが徐々にできてきた児童が、二人の位置を入れ替えながら跳ぶことに挑戦する場面。クロームブックを設置し、自分たちの動きを撮影しながら、その動画と見本とを比べ、位置を変えながら跳ぶ動きについて試行錯誤し取り組んでいた。

【児童の課題解決の様子】

導入から活動に入った場面

ペアの追求の様子は、おおむね以下の３つに分けられた。

「試し→動画視聴→試し」を繰り返すペア
試しの運動をしてすぐに動画を確認していた。

視聴して動きを思考してから試すペア
活動に入ってすぐに見本を確認していた。個人で確認するペア（写真）と、１台を２人で見合うペアがあった。

写真①

動きを繰り返すペア
見本の動画を確認せずに、運動を試していた。入れ替わりがうまくいかずに何度も試していた。

取り掛かりの場面では、見本と自分たちの動画を見比べる必要感に差があったが、児童同士で声をかけあう場面も多く見られた。また、ICTを自分たちの必要感に応じて活用していた。

中間の振り返り　→　追求　→　次時への願いをもつ場面

途中で教師が声をかけて全体を集め、片方ずつ交代して跳ぶ方法をTVモニターに動画で示した。位置交換の動きを、一人ずつ交換して跳ぶ見本を見たことで、動きの仕組みや本時の課題が再確認された。その後ペアの練習に戻ると、児童は片方ずつ交代して跳ぶ方法を試した。何度も交代の場面で引っかかったペア（**写真①**）は、前半は動画を見比べる場面があまりなかったが、教師がタイミングを見て動画をもとに交代の場面に焦点を充てると、動画を見る必要感がうまれた様子であった。（**写真②**）

写真②

ペアごとに課題は違ったが、どの子も「できるようになりたい」と主体的に取り組むことができた。児童はできそうな感覚をもち始めたところで活動は終わった。

振り返りの入力は、Canvaに入力した。交代のところでつまずいてしまう、**写真①・②**のペアの１人が、「移動する人も回すとできる」という気づきを全体の場で発表した。運動の技能ではなく、ペアと一緒に体を動かす良さを感じている姿であり、次時も挑戦したいという意欲を高めた。本単元の課題（多様な動きを組み合わせる）が４年生の実態にあったものであり、単元の運動の特性上、動画の利用が課題解決や意欲を高めるために有効に働いた。

４　研究会の要点

- 連鎖交互跳びの教材化について。（縄の長さや形、重さ、BGMの必要性について）⇒多様な運きや巧みな動きの組み合わせができる教材。大きく回すことと跳びやすいリズムで跳ぶことをねらいとし、その手立てとして教材や場の選択をした。
- ペアの作り方⇒「だれとでも跳べる」というねらいのもと、生活班を基盤に、その中でペアを変えながら取り組んだ。
- 動画を見ることは、実態の認識に有効である。動きの構造を見る為にも有効だった。
- ICTを巧みに使いながら練習するサイクルが良かった。
- ペアの活動で、ペアで１台の端末ではなく２台を利用していた。そのことで見本と自分たちの映像を比較するなど選択肢が広がる。

５　指導者の助言

連鎖交互跳びという教材は、現在、教材化の研究を進めている教材。今回選択した縄の長さや重さなど、運動の特性上適していた。体つくり運動で大事なのは、できた・できないではなく友とやる心地よさを感じることである。本時は、友と関わるよさや体を動かす心地よさを児童は感じていた。途中で止めて全体を集めたことは、自分たちがやっていることが果たしてよいのか、という迷いがあった児童の思考を整理することにつながり、大変良かった。その後、ある程度手ごたえを感じて撮影する児童の姿があった。本時はそこで終わってしまったが、振り返りの場面で他の児童のアドバイスをもらい、次の見通しがもてた。運動の特性上、「同調性」が求められるが、振り返りを見ると、「リズム」や「タイミング」といった言葉があり、的を射たものとなっていた。練習をする児童と動画を見ている児童とに分かれていた場面を見ると、リアルタイムに練習している時にお互いに見合う場面が入ってくるとさらに良い。

６　今後の課題

- 学習課題とその解決のために児童が見る視点が繋がっていないと、ICTは手立てとして効果的に使えないことが示唆された。他の単元、他教科においても示唆された点を踏まえ、授業づくりをしていきたい。
- 互いに直接見合ってアドバイスする、というな直接的なやり取りの場面も取り入れ、児童の必要感に応じてICT活用ができるようにしたい。